

# 天 界

第234號 (第 20 卷)

(昭和15年) 10, 11, 12月號

卷頭

宇宙を觀る、人生を觀る

隨筆

山 本 一 清

ドイツに、アストロノミシュ・ナハリヒテン *Astronomische Nachrichten* と呼ぶ天文學雜誌がある。不偏不黨の純學術雜誌で、嘗にドイツのみならず、露、瑞、丁、捷、土、波、白、蘭、伊、日、英、佛、米、西、葡など、殆んど全世界の各國の天文學者からの論文が集まり、其の永い歴史と共に、最も權威ある出版物の一つである。この雜誌が発刊滿一百年を迎へた時、わが「天界」誌上(第1卷第11號第223~224頁)に簡単な紹介を試みたことがあるが、會の創立以來の會員でない、知らない人が多いわけだから、再び其の要領を、こゝに記すこととする。ナハリヒテン誌は學曆1821年九月にドイツ國のアルトーナ天文臺長シウマヘル H. C. Schumacher 博士が創刊した。當時、アルトーナ市はデンマルク國の海港都市で、ホンの隣り同志のドイツ國ハムブルグ市と互ひに其の覇を争つてゐた町であるが、此の學術雜誌の發刊に當つて、デンマルク國の大藏大臣メースティング Mösting 氏の協力と同情を得て、“天文學上の小論文や、觀測結果や、天體位置の推算豫報等を各國各地の同學者間に迅速に頒布する”といふのが目的で此の雜誌を發刊した。(因みに、一月面の、ほど中央部に Mösting といふ噴火口があることを讀者は知られるであらう。これはこうして學界の進展に貢献した丁國文部大臣メースティング氏の功績を永久に紀念するため、學界の總意を以つて、命名されたものである。日本にも此うした文部大臣が一人ぐらゐほしいものと思ふ。) ナハリヒテン誌は發刊當初から、學界の大御所であるベセル Bessel, オルバース Olbers, ガウス Gauss 等が之れを援助し、それ々々多くの寄稿論文を寄せてゐたので、忽ち學界一般に重んぜられる所となり、漸次、各國の天文學者も大に之れを利用するに至つた。内容は、初めから寄稿者の意志を貫んで、獨、佛、英、ラテンの4種の言語なれば、原文のまま載せる規定であつたが、今日までの經過から見ると、ラテン語の論文は殆んど見當らないけれど、其の代りに、イタリヤ、スペイン、ポルトガルの3ヶ國の言語のものも載せられ、又、必要に應じて、挿圖として、木

版、銅版、凸版等をいろいろ用ゐてゐる。發刊以來の責任編輯者は

シウマヘル	H. C. Schumacher	1821年から1850年まで
ペテルゼン	A. C. Petersen	1851 // 1854 //
ハンゼン	P. A. Hansen	1854年二月から同年十月まで
ペーテルス	C. A. F. Peters	1854年十一月から1880年まで
ペーテルス	C. F. W. Peters	1880年 // 1882年 //
クリューゲル	A. Krüger	1882年 // 1896年 //
クロイツ	H. Kreutz	1896年 // 1907年 //
コボルト	H. Kobold	1907年 //

上記のうち、C. A. F. ペーテルスの時代から、アルトナ市は獨國プロイセン領となつたが、クリューゲルの時代からは、プロイセン國の文部大臣の保護と、ア・ゲ天文協會 (Astronomische Gesellschaft) の援助とが加へられた。1902年からはエーベル Martin Ebell 氏が編輯を助けてゐた。この誌雜は、あらかじめ發行日を定めず、材料あり次第に發行する極めて自由なものとし、平常は大判8頁を1號とし、24號を以つて一卷に纏められ、又、普通號に載せ切れない大論文があれば、其れはシウマヘル時代に既に補充號 *Ergänzungshefte* を出版したことがあり、之れは費用其の他の關係で、其の後暫く中絶してゐたが、クロイツ時代に至つて、之れを復活した。又、コボルト時代に、1913年から文獻附録 *Literarisches Beiblatt* を發刊した。又、近年は彗星や、小遊星や、變星、無線報時、其の他、急を要する觀測報告、推算豫報の迅速頒布を徹底するため、1919年からは、觀測報 *Beobachtungszirkular* なるものを發行するに至つた。——さて、近年、コボルト老が引退することとなつたので、1938年九月末、即ち第6387號(第267卷)を以つてコボルト氏の編輯を打ち切り、取り敢へずベルリンの計算局が編輯することとなり、只、編輯局は元の通りキール市モルトケ街80番地であり、印刷は同市 Schaidt 會社であつた。ところが、最近に、1939年に入つて、第269卷からは、愈々其の編輯局をベルリン市ダレム區の Copernicus 學院(元の計算局 *Rechen-Institut*, 昨1939年改名。本誌221號340頁参照)に移し、毎月一回發行とし、紙形も少しく小形となり、各頁2段であつた組み方も、一段組みの體裁となつた。編輯主任はシャウ W. Schaub 氏が當つてゐる。之れと同時に天文通報中央局も Kiel から Berlin に移つた。

因みに、コボルト氏はナハリヒテン誌の編輯に従事すること前後31ケ年、實に記録破りの永い勤めであつたが、其の間に、天文學術の發展と共に雜誌内容や別刊等の事業にも常に學界をリードし、前の歐洲大戰中にも大して變化を見せず、一時は、今のコペンハーゲン天文臺の如く、有らゆる天文學的通報の中

中央局として活躍したことは天つ晴れであつた。コボルト氏は其の一生を、此うした編輯事業に費したのではない。もと々々同氏は若い頃から、ホンガリ國のオギ、イラ、獨國ストラスブルグ、キール等の天文臺長に歴任し、キールに移つて、複雑な編輯事務を主宰しつつも、同氏の最も得意とする恒星宇宙の構造に關する研究を進め、Bau des Fixsternsystems や Stellarastronomie 等の名著を公にしてゐる。

ドイツは20年の逆境を乗り越えて、今回の大戦争には、澳、波、捷、丁、諾、蘭、白、佛の各國に既に絶對的に勢力を張り、近い將來には英國をも蹂躪せんとしてゐる。恐らく、今後、ドイツの勢は全歐を壓倒するであらうが、學界に於いても、やはり、後はドイツが著しく雄飛するであらう。このプログラムは、しかし、ドイツが今回の戦勝を獲る以前から、既に定められてゐたものと見て好いかも知れない。既に本誌にも報じた如く、ベルリン・ダレム區の Astronomisches Rechen-Institut は昨年來、意味ありげに、“Coppernicus-Institut”と改名され、其の上、上記の如く、Nachrichten 誌は、Coppernicus-Institut 内の Gesellschaft の手に歸して了つた。即ち、ドイツの天文學界は Coppernicus-Institut に統制され、又、新時代の國際天文學界は Gesellschaft のヘゲモニー下に置かれること、殆んど確實である。こうして、ドイツの天文學界の新體制が確立した以上、戦亂の終るのを待つて、(或は、待たなくても)今までの國際天文同盟 (International Astronomical Union) は解散され、新たに、Gesellschaft を中心とし、ドイツ語とフランス語とを基幹とした組織が出来上るものと豫想される。

ちなみに、最近のドイツ學界に一つの動きは、Kopernik (或は Coppernicus) を、ポーランド人でなくて、ドイツ人だとする風潮であり、之れを立證する資料も集められつゝある模様である。殊に、こんどの戦亂によつて、20年間の命脈を保つてゐたポーランド國が、ドイツに抵抗したがために、あへなく亡び、コベルニクに特に縁效の深い Thorn も、Krakau も、Frauenburg も、Heilsberg も、悉く、きれいなサツパリと、ドイツ領になつて了つた。従つて、コベルニクを今更ポーランド人だと言つて見たところで、實際上には、何の意味も無いことになる。そして、萬事がドイツの天下になりつゝある。

コベルニクの人物や性格等については、近いうちに改めて本誌にも書いて見たいと考へてゐるから、讀者も期待してゐて貰ひたい。(1940—9—5)